

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する桔梗色の空と三角標

石井竹夫

帝京平成大学薬学部
e-mail : tishii@thu.ac.jp

Bellflower Color Sky and Triangular Signs Appeared in “Night on the Milky Way Train” Written by Kenji Miyazawa

Takeo ISHII

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Teikyo Heisei University

Keywords : 文学と植物のかかわり, 薄明窮, 鐘, キキョウ科, 教会堂, 乳液, 送電鉄塔

童話『銀河鉄道の夜』（第四次稿）には、天上世界の空の色を「桔梗色」と表現している箇所が四つある。賢治は、物語の地上世界の景観に現れる空を「鋼青の空」と呼んでいたが、天上の景観に現れる空は、物語の展開に沿って「がらんとした桔梗いろの空」（八、鳥を捕る人）、「きれいな桔梗いろの空」, 「桔梗いろのがらんとした空」, 「桔梗いろのつめたさうな天」（九、ジョバンニの切符）と「桔梗いろの空」に様々な形容語句を付けて表現している。

「桔梗色」とは「キキョウ」（キキョウ科；*Platycodon grandiflorus* (Jacq.) A.DC.）の花のような青みを帯びた紫色のことを言う。この「桔梗色の空」は地球上では日の出前や日没後の空が薄く光る現象（薄明；twilight）と共に現れる。正確に言うと、水平線と水平線下の太陽の中心となす角度が18度（伏角）以内にある時に現れる（原，1999）。賢治は、空が明けて来る様子を短編『柳沢』では「深い鋼青から柔らかな桔梗、それからうるはしい天の瑠璃」、あるいは童話『まなづるとダァリヤ』では「夜があけかゝり、その桔梗色の薄明の中で」と表現した。「鋼青」や「桔梗色」は賢治の好きな色（宮沢，1991）であると共に宗教的なイメージの強い色でもある。賢治の仏教・西域童話である『インドラの網』では、「桔梗いろの冷たい天盤には」とか「その冷たい桔梗色の底光りする空間を天が翔けているのを私はみました」という表現がある。仏教では、紫色は高貴な色として扱われ高僧が身に着ける袈裟（けさ）の色に使われたりする。また、「キキョウ」の花の形は教会の「鐘」に似ているので英語圏では“Bell flower”と呼ばれる。この物語でもキリスト教のイメージに彩られた天上世界を現す一つの手段として「桔梗色の空」を使っている。しか

し、それだけではない。キキョウ科植物の「枝を切れば白い乳液が滴り落ちる」という特徴も生かしていると思われる。一章の「午後の授業」で、ジョバンニの理科の先生が「天の川（＝銀河）」を「巨（おほ）きな乳の流れ」と比喩したように、「銀河」はギリシャ神話の女神ヘラの乳が流れた「乳の河（英語の Milky Way）」と呼ばれる。このように賢治は、物語で「十字架」や「賛美歌」など、キリスト教のイメージに彩られた天上世界の空を「桔梗いろの空」と記載したが、このキリスト教的イメージは物語の進展につれて大きく変貌する。本稿では、前半の二つと後半の二つに分けて、この「桔梗いろの空」の下に立つキリスト教的なイメージを持つ「三角標」の変貌ついて考察する。

1. 前半二つの「桔梗色の空」

最初の「桔梗いろの空」は八章の「鳥を捕る人」に出てくる。天の川で鳥を捕って商売にしている「鳥捕り」が鳥を捕まえる方法が描かれている。

「あすこへ行ってる。ずるぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまえへるとこだねえ。汽車が走って行かないうちに、早く鳥がおけるといゝな。」と云った途端、がらんとした桔梗いろの空から、さっき見たやうな鷺（さぎ）が、まるで雪の降るやうに、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっぱい舞ひおきて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだといふやうにほくほくして、両足を かっさきり六十度に開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押へて、布の袋の中に入れるのでした。すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くぺかぺか光ったり消えたりしてゐましたが、おしまひたうとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。と

2015年6月8日受付。

人植関係学誌. 15(1):39-42, 2015. 資料・報告.

2. 後半二つの「桔梗色の空」

三番目は、何万という小さな鳥たちが「美しい美しい桔梗いろのがらんとした空の下」を通るという表現で出てくる。銀河鉄道の列車は、この時コネチカット州とコロラド高原の中間地点を通過していると思われるので、賢治は、アメリカ大陸の中央で世界有数の渡り鳥の飛行ルートの一つとして知られているミシシッピ川とミズーリ川の合流点辺り（セントルイス？）を思い浮かべ物語を書いていたのかもしれない。

川は二つにわかれました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれてその上に一人の寛（ゆる）い服を着て赤い帽子をかぶった男が立ってゐました。そして両手に赤と青の旗をもってそらを見上げて信号してゐるのでした。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふってゐましたが俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすやうにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のやうに烈しく振りました。すると空中にざあっと雨のような音がして何かまっくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲玉のやうに川の方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそっちを見あげました。美しい美しい桔梗いろのがらんとした空の下を実に何万といふ小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせはしくせはしく鳴いて通って行くのでした。

（九．ジョバンニの切符）

物語では高い「櫓（やぐら）」の上で「信号手」が青い旗を振りながら「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥」と叫んで渡り鳥の群れを誘導するというファンタスティックな内容になっている。しかしここでも、前記二つの引用文の解釈と同様に「三角標」のような「櫓」に宗教的な意味合いを持たせることができるだろうか検討してみたい。賢治の宗教と科学を融合させた実践童話『グスコブドリの伝記』（1931）に興味深い二つの「櫓」が登場する。一つは、火山島の海岸沿いの潮汐発電所からの電力を送電する「送電鉄塔」で「白く塗られた鉄の櫓」と表現されている。もう一つは、学校の中に飾られている模型の「櫓」である。この「櫓」は、とても奇妙なもので、スピルバーク制作総指揮の映画『トランスフォーマー』（2007）に登場する質量がほぼ同じの様々な姿に変身できる「金属生命体（Transformers）」のようにつつまれを廻すとこの「櫓」が「船」のような形になったり「むかで」のような形になったりして変化する。これは、有機化学で扱う分子の立体配座（conformation）の概念にヒントを得ている。例えば、シクロヘキサン（C₆H₁₂）は分子式と分子量は変わらないのに構造的に

は「船型」と「いす型」（ムカデのようにも見える）の二つの立体配座が存在する。それゆえ、三番目の「桔梗いろのそら」の下の「櫓」と「信号手」は、実際に存在する鉄の「櫓」の上に「信号機」を付けた路線脇の巨大な「腕木式信号機」と『グスコブドリの伝記』の様々な形に変わる「櫓」の模型や「送電鉄塔」のイメージを融合させて創作したものかもしれない。この「櫓」も「三角標」の一つだとすれば（三角測量の三角点にはならないと思われるが）、物語に頻繁に出てくる「三角標」のイメージは、「教会堂」の「鐘楼（尖塔）」から「信号機」の付いた鉄の「櫓」に変貌したことになる。すなわち賢治は、頭の中の取っ手を廻して、三番目の「桔梗いろの空」が出てくる場面で、「三角標」を宗教色の強い「教会堂」の「鐘楼」から近代科学を象徴する鉄の「櫓」をイメージできるように変身させた。セントルイスは商工業都市（自動車、飛行機、化学薬品などの工場が濫立）であり、物資輸送の鉄道網が整備されているので「櫓」を巨大な「信号機」とみなしてもおかしくない。賢治が『銀河鉄道の夜』を執筆していた1920年代のアメリカは、「黄金の20年代」と呼ばれ自家用車やラジオ、電話、洗濯機、冷蔵庫などの家電製品が普及し、大衆の生活は大量生産と大量消費の時代に突入していた（Wikipedia）。引用文の中の「がらんとした空」は、一番目の「がらんとした桔梗いろの空」の「がらん」の意味ではなく信仰心を失い、科学を拠り所にして「機械文明」の中に生きている人たちが「教会堂」へ行かなくなった「空虚（からっぽ）」な様子を比喩したのかもしれない。また、その「空の下を実に何万といふ小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせはしくせはしく鳴いて通って行くのでした」とあるのは、「がらん」とした「教会堂」のそばを、宗教の代わりに科学を信仰するようになった人たちが「機械」に使われ、あくせくと時間に追われる様子を比喩したものとも考えられる。1936年のチャップリン（C. S. Chaplin; 1889-1977）の資本主義社会と機械文明を痛烈に風刺した映画『モダン・タイムス』が彷彿される。

また、「川は二つにわかれ」の「二つ」は「善」と「悪」あるいは「真」と「偽」を表しているのかもしれない。「まっくらなもののかたまり」を教派の信者達（キリスト教では「群れ」と呼ぶ）とすれば教派の信者たちが自分を見失い「善」と「悪」あるいは「真」と「偽」の判断を教派の指導者に委ね（あるいは判断をお金で買う）、その判断に沿って集団で行動している様子にも受け取れる。これは、『農民芸術概論綱要』（1926年頃）の「宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷たく暗い／芸術はいまわれらを離れ然もわびしく墮落した／いま宗教家芸術家とは真善若くは美を独占し販るものである」に対応する。

最後に登場する「桔梗いろの空」は、物語の最大の

山場である「蠍の火」の逸話が語られる場面であり、「桔梗いろのつめたさうな天」という表現で登場する。ここで登場する「三角標」のイメージは前報で報告したように三角測量にも使われることのある冷たい鉄でできた「送電鉄塔」である（石井，2015）。

川の向ふ岸が俄（には）かに赤くなりました。楊（やなぎ）の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたさうな天をも焦がしさうでした。ルビーよりも赤くすきとおりにリチウムよりもうつくしく酔ったようになってその火は燃えてゐるのでした。

「あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」

ジョバンニが云ひました。

「蠍の火だな。」カムパネルラが又地図と首っ引きして答へました。

（中略）

ジョバンニはまったくその大きな火の向ふに三つの三角標がちゃうどさそりの腕のやうにこっちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのやうにならんでゐるのを見ました。

（九．ジョバンニの切符）

文学とキリスト教に造詣の深い佐藤泰正（2000）は、賢治が物語で「十字架」や「賛美歌」など、キリスト教のイメージに彩られた天上世界を「高く桔梗いろのつめたさうな天」と呼び、「蠍の火」がこれを黒々と焦がしつつ燃え続けていると表現したことに関して、これは賢治のキリスト教を含めた既成宗教（仏教の宗派、キリスト教とイスラム教の教派）への異和あるいは批判の激しい表現であるとした。しかし、賢治が批判しているのは宗教だけではない。科学に対しても異議を唱えている。

賢治の『農民芸術概論綱要』は、戦前戦中のジャーナリストの室伏高明の『文明の没落』（1923）やその続編の『文明の没落・第2（土に還る）』（1924）に強く影響を受けていることが賢治研究者によって明らかにされている（上田，1988）。

『文明の没落』には、「神の代わりに試験管が、教会の代わりに工場が置き換えられてきた（p.13）。」「宗教が科学によって、信仰が智によって代へられただけではない。教育も芸術も、あらゆる文明の形態は一樣に巨大なメカニズムの一作用にまで墮ちてしまつてゐるのである（p.39）。」「宗教的精神の旺盛と、ゴ

シック芸術の歴然たる光を見ることのできた中世紀は、この意味において正に文化の時代であつたのである（p.174）。」「近代科学は、一歩々々宗教的表現を征服し、近代的精神の機制をもって、中世紀的靈性の王国を、この地上から駆逐したのである（p.176）。」「科学は心をもたない。冷たい知識の網である（p.177）」（括弧内はページ、下線は著者）などの記載が続く。また、その続編である『文明の没落・第2（土に還る）』には、「基督教は、今日はイエスのそれではない。お弟子の基督教である。お弟子によって翻訳され、誤訳され、改作され、精神が盗奪されて骸骨が残つた。イエスは上昇である。教会は墮落である。力なき牧師の蒼ざめた顔を見よ（p.47）。」「パウロとヨハネを見るように、人々は大学教授を見る。懷疑は今日は神への懷疑である。科学は新しき神である。科学は疑ふべからざる威厳である。科学は、懷疑から生まれた。そして信仰となつたのである（p.53）。」とある。

『文明の没落』にある「教会の代わりに工場」の「教会」をキリスト教寺院の「教会堂」の「鐘楼（尖塔）」やイスラム教寺院の「モスク」に付随する「ミナレット（尖塔）」とし、「工場」を「工場」に付随する「煙突」、「信号機」、電力を供給する「送電鉄塔」に置き換えれば、これらは賢治がイメージした「桔梗いろのつめたさうな天」の下の様々に形を変えていく「三角標」になる。すなわち、「三角標」とは信仰の対象物の象徴でもある。また、「科学は心をもたない。冷たい知識の網である」という室伏高明の言葉は科学を志している者にとっては手厳しい。

引用文献

- 原 子朗. 1999. 新宮澤賢治語彙辞典. 東京書籍. 東京.
- 石井竹夫. 2014. 宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する光り輝くススキと絵画的風景（後編）. 人植関係学誌. 14(1):45-50.
- 石井竹夫. 2015. 宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する楊と炎の風景（前編）. 人植関係学誌. 14(2):15-18.
- 佐藤泰正. 2000. 賢治とキリスト教—『銀河鉄道の夜』再読一. 国文学解釈と鑑賞 65(2):20-26.
- 上田 哲. 1988. 宮沢賢治その理想社会への道程 改訂版. 明治書院. 東京.
- 宮沢清六. 1991. 兄のトランク. 筑摩書房. 東京.
- 宮沢賢治. 1985. 宮沢賢治全集 全十巻. 筑摩書房. 東京.
- 室伏高明. 1923. 文明の没落. 批評社. 東京.
- 室伏高明. 1924. 文明の没落・第2（土に還る）. 批評社. 東京.